

伸ばす教育 潰す教育

『新学習指導要領のもとで』

みつばやし けいこ

学習塾に期待されるもの

新学習指導要領のもとでの新学年が始まった。学校側からも、父母側からも不満と不安の声が聞かれた週休完全2日制、教科内容3割削減の新カリキュラムは滑りだした。

文部科学省は、学力低下を懸念して週休2日制を実行しない私立学校に、週休2日制実施を勧告し、時間数の多い私立校との学力差を危惧する公立高校には、臨機に補習授業をするように勧めている。

そして、学習塾には学校が休みになる土曜日に、課外活動などの分担を打診している。同時に夜間7時過ぎの通塾は望

ましくない、という要望も以前から伝え聞かされている。

文部科学省が「学習塾」というとき、さまざまな規模の、さまざまなポリシーをもつ学習塾の、どこを基準に提言しているのか不明である。おそらく、さまざまな規模、さまざまなポリシーがあることすら視野にないのではないかと感じさせられる。すべてが予備校のような進学塾と誤解されているのではないだろうか。

まず、土曜日の課外活動の件は、相当な規模の学習塾を対象に意見を聴取しているのであろうけれど、大手進学塾では、課外活動は塾の専門ではないし、引き受けても採算ベースにのせられない、と後ろ向きである。中堅の学習塾で、検

討したい、と言う積極的な反応もあるようだが、これも決してボランティアとしてもよいという意味ではないと考えられるから、それ相応の予算の裏付けがあれば、というのが大前提であろう。レクリーダーの資格をもった講師もいるであろうし、課外活動を定期的実践している学習塾もあるから、予算の裏付けが取れば、一刻を惜しんで競争している進学塾は別として、検討に値すると言えるだろう。

私の塾では、子供達から野外活動の希望が出たときだけ登山に出かけたり、夏のキャンプに連れだしたりしてきたが、最近では、経済事情から少しでも出費の重なることは避けなければならなくなってきた。一人一人の通塾日数も非常に少なくなってきているから、通常、教科学習以外の活動に振り替える余裕もない。そして、経費の突出することを企画すれば、この不況下では参加できる子とできない子が出て不平等になるので、積

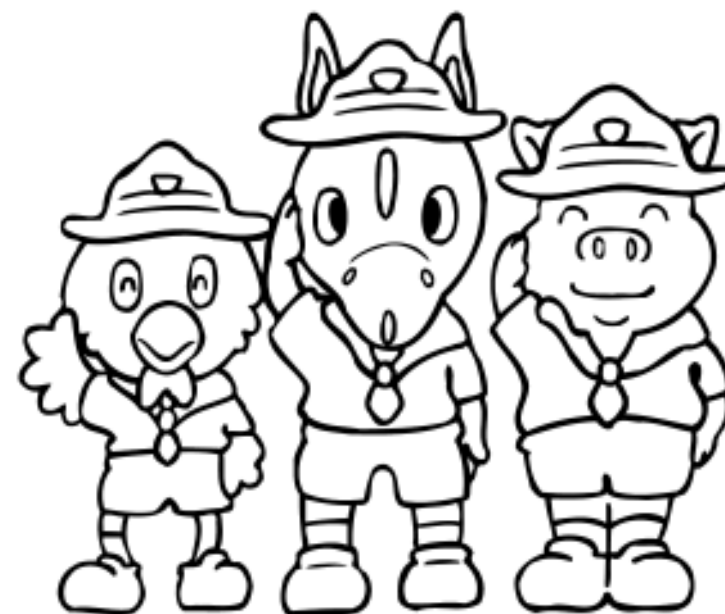
極的にはできないでいる。多くの学習塾で、公的予算の後ろだてがなければ、文部科学省のこのような活動に協調できないと言えるだろう。

また、夜7時過ぎの通塾に関しては、それぞれの事情がある。最近では母親達のアルバイトが時短でカットされるため、別の職場で夜のアルバイトを兼ねている場合も少なくない。お母さんのいない時間を塾で過ごしている子供達がいる。

また、それでなくとも、学校の部活を終えて、食事をとってから塾へ来れば、7時ころになってしまう。食事もしないで、塾へ直行することの方が心身に無理がかかることだろう。

私の塾では、本人が一番都合のよい時間帯を選んで通塾している。文部科学省が、一人一人の事情を知らないまま、下校後の子供の時間の過ごし方にまで言及することは、過干渉である。それは、各家庭の問題であるはずだ。

学習塾についても、子供達のストレス





の元凶であるかのような見方は心外である。私の塾では、テスト前など、子供達が12時頃まで自発的に学習していくことがある。家に帰っても集中できない事情が多いし、困っても聞ける人がいないからという場合が多い。望んで学習しているときには、悪いストレスなどかからないものである。

時間の遅いことと言えば、卒業生が、塾の終わるのを待って、困りごとの相談に来たりする。塾は、学校の終わった時間から始まって、子供達がいなくなったときに終わる。好んでそうしているわけではない。ときに死にたくなる子も訪ねて来ることがあって、開けていなければならぬからだ。

不況で学費が払えない子達もいるから、塾経営は今では社会事業のようになっている。営利のために夜間営業をしている

のではないという現実を文部科学省は、きっと想像もできないことだろう。

一斉授業と自立学習

新学力観では、子供達の生きる力を育てる学力、自ら考える力の重要性をうたっている。学習塾で、生きる力を育てる教育と言っても難しいと考えられるかも知れない。しかし、良心的な塾では、塾こそ生きる力を育てる教育をしてくれているのだと思う。

もっとも、これまでの塾の授業はさまざまである。学力別にクラスを組んで、講義形式の授業をしている塾もあれば、個別の指導に徹しているところも多い。

私の塾でも生徒の人数が多かったころには、教科別の講師が講義形式で授業を

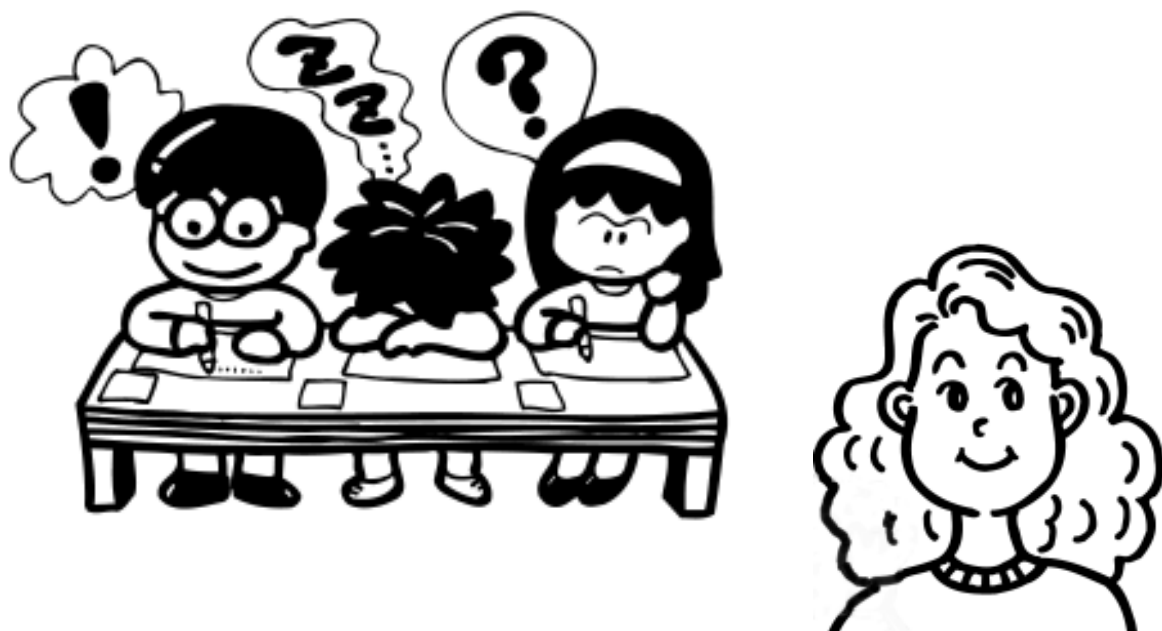
していた。講義形式の授業の欠点は、一定時間、生徒に強制的に講義を聴いてもらわなければならないことである。

隣の部屋で授業を聞いていると、「おい、聴けよ」とか、「黙れ!」などという講師の声がよく聞こえていた。生徒達の興味をひいて、講義を聴かせるためには、勝手に先へ進んでいく子がいても、都合が悪い。したがって、「まだ先へ進んではいけない」という制止さえ聞こえてくる。学校教育で慣らされていて、みんなおかしいと思わないようだが、隣の部屋で聴いていると、これはおかしい。

「聴けよ」と言わなければならないほど、生徒は教師の話に興味をもっていない。授業では、生徒の声を聴かなければならないのに、教師は、「黙れ!」と言う。そればかりか、自分で進められる生徒に、「先へ進んではいけない」と言う。こうして、教室で発せられる言葉だけを並べてみると、授業の進め方が間違っているのだが、大方の学校も学習塾も講義形

式の授業では、それに疑問をもたず、生徒を押さえつけることで、一方的な講師の声だけを響かせて、よしとしている。

これを改善するには、個別の対応しかない。個別対応では、一斉指導の講義はない。その分、読めばわかる、單元ごとの導入の説明の丁寧なテキストを使って、個々の生徒に読んでもらう。読んでテキストの演習にはいる自学自習方式の学習形式をとっていけば、「聴け」という必要もなければ、「黙れ」と言う必要もない。まして、「先へ進んではいけない」などという、とんでもないことを言う必要もない。きわめて静かに集中してマイペースの学習が進む。生徒は読んで、辞書で調べても、考えてもわからないときだけ教師に聞けばよい。この方式で、たくさんの成績優秀者を生みだしてきたが、じっと見ていると、子供の心に何らかのトラブルがあるときには学習がはかどりにくい。それは、ある時間だけの場合もあるし、何ヶ月も続くこともある。



心のトラブルは、学校が原因である場合が多いが、ともだち関係であったり、家庭での問題であったりする。そんなとき、塾は特別の妙薬をもたないから、ただじっと見ているだけである。チックの症状をもって入塾して来る子も少なくないが、叱らない干渉しない教室の中で、いつか自信をつけ回復していく。

いわゆるペーパーテストの結果で見る学力に、ゆるやかな進歩しか見られなくても、自分で考える学習によって心が解き放たれて明るくなった子供達を見ることは、教師にとっても嬉しいことで、それは生きる力につながる成長だと考えたい。

私の仕事は、子ども達を黙って見ているだけである。赤ペンをもって助言を入れるだけであるが、生徒から、考えても調べても分からないという質問がきたら、どの学年のどの教科にも答えなければならない。ただ、平素は黙って見ているだけである。これは試行錯誤の末、生徒達

の自立学習のために行きついた方法である。それなら塾など来なくてもいいということにはならないのが不思議である。

4月、高校3年生になる男子に、予備校を勧めたら、やっぱりここがいいから、ここへ来るという。文系志望なので、ようやく数学が終わって、見ているほうも、ほっとしているところである。

精神科医の、なだいなださんのお話を聞いていたら、精神科のカウンセリングでも、やはり患者さんの話をひたすら聞くだけで、自分自身は黙っているのが仕事だ、と言われていた。何か共通するところがあるようだ。

学力について

何をして学力というかは、大変難しい。これまでの学校で評価されてきた学力は、ほとんどがペーパーテストの得点

結果であった。狭い範囲の与えられた知識を吸収して、テストで正確に解答できるかどうかによって、学力が決まってしまう。

今、授業時間が減少することで、力の低下を心配されている学力も、詰め込み学習で与えられる知識の量のことであろう。いわゆるマスの時代の受験対応の知識の量を指す。

学校外で得たどのような学力も、受験の枠外の知識であれば、これまでの学力評価の物差しにはかからないから、その力は評価されなかった。

例えば、自分好みの文学作品をどんなに読んで精通していても、それはわずかに国語の力に反映するだけで、決められた範囲の学校のテストに答えられなければ、学力はないと見做されてしまう。哲学や人間の生について、死について、深く考え、読んでいても、大学の哲学科に入るまでは、学校はその学力

をはかる物差しをもたない。しかも、大学の哲学科の入試は、哲学ができて、受験教科に哲学はないから、受験科目のテストができなければ受け入れられない。芸術学部については、専科の技術試験があるが、やはり受験科目によって選抜されるため、入試向けの学力が軽視できないと言うジレンマがある。新学力観ではどうかと言えば、入試制度を大きく変革しないかぎり、真の学力を問うことは難しそうだ。

しかし、総合的学習によって視野を広げ、真の学力を問い直そうとしている点は、子供達の可能性を広げる意味で評価してよいだろう。

真の学力とは、受け身で詰め込まれた知識の量によってはかられるものではなく、自分の頭脳と肉体で考えることのできる創造的な力を意味する。それは何も「新学力観」といわれるような新しい力の発見ではなく、ギリシャの時代からす



で人間が開発してきている力を指すのではないだろうか。それは半世紀前の日本にもまだまだ健在であった。

日本社会が経済成長に押されて、急に誰もが高学歴を望むようになり、大学へ、大学へと無考えに子供達を追いやるようになって、大学も駅弁の数ほど増えたが、受験者が多すぎて個別に人間を見るような入学試験もできなくなった。

マークシートではかられる学力には限界がある。マークシートでは、人が設定してくれた解答の中から選ぶだけの力の試験である。深い洞察力も創造性もそこでははかれない。

半世紀前のように、全問記述式の試験が戻ってくれば、生徒達の学習も深いものになっていくのではないだろうか。入学試験でそれが無理なら、学校教育ではつとめて手づくりの授業、手づくりの問題で、生徒の創造的な力を掘り起こす

ような実践を考えてほしいものである。

学習塾からすれば、学校は経済的条件に恵まれていて、うらやましい。

命がけの教育者

学校はうらやましいと言ったが、学校にも塾の教師の比ではない、夜を日につぐ働きをされている教師がおられることを知って、感服させられた。まさに生きる力を育てる、体あたりの実践者である。

青少年の薬物汚染について、たくさんの著書があるので、読まれた方も多いと思うが、先日、横浜市立戸塚高校定時制教諭の水谷修氏とお話をする機会があった。先生は学校の授業が終わると横浜の中華街で、「夜回り」と言って、夜中の2時頃までピンクピラはがしを

して、非行、薬物依存の少年達を見つけると話し合い、自宅へ連れ帰って、いっしょに生活しながら少年達の更生に協力されている。

現在は戦後第4次の少年犯罪の多発期と言われるが、最近の子の特徴は、ものを自分で考えられない子が多い。犯罪の多くは万引き・窃盗・強喝・性非行で、薬物依存も蔓延している。覚醒剤を密入国の売人から買った高校生が、暴力団と繋がっていく。決して進んで入っていくのではないと言う。1割は家庭環境が劣悪で、寂しさから非行に走っているといわれる。

少女の売春については、雑誌の「チャンピオン」など、性行為が出てきて、漫画のなかの女の子は、男の言うままで、多くの少女達がそういう中に無造作にさらされている。これは嘘だ、と言える子供を育てなければならぬと言うのが、水谷先生の忠告である。先生は、中年の

男と女の子がいっしょにいるのを見つくと、男性を問いただして、女の子を帰宅させる。何故そういうことになるのかを女の子に聞くと、お金が目当てではなく、大切にされていないからだと言う。要するに答えは簡単で、子供を大切にすればよい。褒められて育った子は、自信をもっているから非行に走らない、とも言われる。

最近の、ベネッセの小学5年生と中学2年生対象の学力テストでも、成績で分けた4グループのうち、父母とよく話すのは成績のよいグループで、下位になるほど、会話は少なくなり、「勉強しなさい」と言われる頻度が高い、という調査結果が報告されていた。

当然のことだが、子供を大切に、会話を大切にするのが、子供の心を育て、非行を防止し、学力向上にもつながると言うことを教えてくれる事例である。